

大学出版

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク

No.79
2009.8

夏

特集

「学」と社会をつなぐ 科研費出版助成

科研費出版助成と学術出版——大学出版部を中心に—— 橘宗吾……………2

日本学士院賞と科研費出版助成 安藤隆穂……………8

自然科学学術成果の日本語出版と英文発信 井口正人……………12

人文学、社会科学の振興と科研費出版助成 松本功……………16

ソウル国際ブックフェア「日本年」 足立佑……………20

●連載

初版本、ナンセンスなフェイシズム

加藤周一編『世界大百科事典』 酒井道夫……………表2

大学出版部ニュース……………22



一般社団法人大学出版部協会

THE ASSOCIATION OF JAPANESE UNIVERSITY PRESSES

初版本、ナンセンスなフェティシズム

加藤周一編

『世界大百科事典』

酒井道夫（武蔵野美術大学）



ひと際くたびれた右から2冊目の索引巻。1955年版は結局、わが研究室に……。

恥ずかしながら近頃はかなりウイキペディア情報に依存していて、これで大方は用が足りてしまう。で、全巻三十五冊に及ぶ百科事典（平凡社刊、一九八八、造本・デザイン・杉浦康平）を所有してはいるものの場所塞ぎ。古書として購入して五、六年近くを経ていると思うが、これまで数えるほどしか利用できていない。でも、あこがれの『世界大百科事典』。このいささか尊大なタイトルで刊行開始されたのが一九五五年版（全三十二巻、林達夫編、装本原弘）。当時私は中学生だった。東京にはまだ瓦礫の山や浮浪児たちの群れも珍しくはなかったのに、戦後に台頭した富裕層の洋間にはこれが麗々しく並び始めていた。とてもじゃないが自分の境遇で所有できる代物ではなかった。

ところが時代は巡る。古書店が百科事典なんか引き取らなくなり、ゴミ収集日に全巻をドカーンと門口に積み上げる場面に遭遇するまでになった。一、二冊で済むのなら失敬してくる手もあるが、こればかりは揃いでなくては意味がない。全巻で五十キロを越えては持ち帰れない。ある話のついでに上記を余談として挟んだら、若い女性が「彼氏が古書店をやっているから聞いてみましょう」と言ってくれた。程なく当の店主から連絡があり、「箱詰めのまま引き取って放置している。検品なんかするとアシがでるからそのまま送っていいですか？ 問題があつたらその際に」と言う。荷物は版元出荷時そのままの梱包で届いた（某中堅セネコン社長室宛）。開封こそしてあるが本を抜き出した形跡もない。刊行以来十五年に及ぶ長い旅路の末に我家に逢着、やつと書架に並んだわけだ。購入価格は仁義としてちよつと言えない。

その後、さる大物政治家旧蔵の一九五五年版があるが譲り受けないかとのお話をいただいた。再版ものでかなり使い込まれた様子だが、こちらは背革特装本。お孫さんご自身でお運びくださって、タダ。「おじいちゃんの形見をゴミ扱いしないで済みました。ありがとうございます」と言っていたのだが、わーい、置き場をどうしようか？

特集

「学」と社会をつなぐ 科研費出版助成

科学研究費研究成果公開促進費（学術図書・新規採択分）年次データ

年度	総申請点数	総採択点数	採択率	配分額
2003	759	340	44.8%	6億5690万円
2004	791	328	41.5%	6億2930万円
2005	712	340	47.8%	6億5980万円
2006	857	352	41.1%	6億9460万円
2007	923	223	24.2%	4億0100万円
2008	791	224	28.3%	3億6760万円
2009	703	239	34.0%	3億9410万円

科研費出版助成と学術出版—大学出版部を中心に—

橘 宗吾 (名古屋大学出版会)

はじめに・科研費出版助成削減の現状

日本学術振興会の管轄する科学研究費の研究成果公開促進費が二〇〇七年度と〇八年度の二年にわたって大幅に削減された。研究成果公開促進費は「学術図書」「学術定期刊行物」「データベース」の三つの種目からなっているが、このうち大学出版部はじめ学術系出版社が主として関わっているのは「学術図書」である(以下では、この種目を指して科研費出版助成と呼ぶことがある)。

この「学術図書」に対する出版助成の予算(新規採択分)は、〇七年度に四〇%削減され、〇八年度にさらに一〇%カットされて、〇九年度はわずかに上昇したものの、〇五年度や〇六年度と比べて四割以上少ない状態が続いている。金額にして〇六年度の七億円弱から〇八年度の三・七億円に(〇九年度は三・九億円)、採択件数は三四〇〜三五〇台であったものが二二〇〜二三〇台になり、〇五年度

や〇六年度と比べて一〇〇件以上少ない。採択率も、それまでの四〇%を超える水準から、〇七年に一気に二四・二%まで落ち込んだ後、〇九年にはやや回復して三四%になっているが、この「回復」は、助成金の削減によって採択される見込みが小さくなったことや、申請手続きの煩雑化などのために、そもそも申請件数が減ったことによる部分が大きいと考えられる。

「学術図書」が、研究計画ではなく、長年にわたる研究の最終的な成果であることを考えると、このような助成金の削減による低い採択件数・採択率は由々しきことである。

この出版助成を申請した学術図書が不採択となった理由について、〇九年度に大学出版部協会加盟出版部を対象にアンケート調査をしたところ、「評価は高いが予算配分の都合上」不採択とされたもの、「刊行の緊急性が認められない」として不採択とされたものが、それぞれ三分の一もあつた。つまり、この二つの理由で三分の二を占めている

のである。仮に大学出版部の申請図書の高さを考慮するとしても、この二つの理由が圧倒的に多いことは動かないであろう。

最初の理由は、文字通り、助成を得て刊行されるべき著作（研究）が、予算削減のために刊行されないことを意味し、学界にとっても社会にとっても大きな損失であろう。また、もう一つの「緊急性が認められない」という理由は、人文学や社会科学について言えば、それが社会や歴史のなかで評価・選択されていくことに重要な意味があることを見ないものであるし、より一般的にも、直ちに効用の明らかでない基礎研究をなおざりにするものだと考えられる。

このように科研費出版助成の削減により、本来、出版されるべき著作（研究）が補助を得られず、刊行が困難となっている状況に対して、大学出版部協会では、昨年六月に文部科学省と日本学術振興会に、この制度の維持と発展をうったえる要望書を提出した。要望書の全文は、大学出版部協会のホームページや『大学出版』七六号（二〇〇八年秋）に掲げてあるので、ぜひそちらをご参照願いたい。

ここでは、まず科研費出版助成によって、これまでどのような成果を上げてきたのかについて述べた後、科研費出版助成削減の影響と助成の必要性について考えていきたい。なお、科研費出版助成について考える際には、言うまでもなく我が国の学術出版全体について見ていくことが望ましいが、十分なデータを得ることが困難であるため、大学

出版部のデータによって代表させざるを得ないことが多い。この点、あらかじめご了解いただきたい。

科研費出版助成の成果

①学術図書の質の高さ 第一にあげるべきは、科研費出版助成による学術図書の質の高さである。

これを、まず恩賜賞・日本学士院賞について見てみよう。周知の通り、恩賜賞・日本学士院賞は現在九九回を数えている我が国で最高の学術賞であるが、昨年秋に、そのうち過去の五〇回（第四九〜九八回）について人文学・社会科学系の受賞者・研究題目を調査したところ、受賞一三一件中四八件が、科研費出版助成の交付を受けた著書によって受賞していた。さらに今年も、新たに二件（うち一件は恩賜賞も受賞）が科研費出版助成による成果であった。これは、平均するとほぼ毎年一件、人文学・社会科学系の受賞のうち三分の一以上が、この出版助成を得て著書を刊行した結果として、恩賜賞・日本学士院賞を受賞していることを意味する（詳細は大学出版部協会のHPを参照）。

他の賞についてはどうだろうか。〇二〜〇六年度の五年間に大学出版部で科研費出版助成を受けて刊行した書籍三〇〇点弱（自然科学系の書籍を含む）について、昨年春に調査したところ、上記の日本学士院賞を含む四〇件以上の受賞があった。様々な学会賞、サントリー学芸賞など社会的な反響を示すより一般的な賞、さらには国際的な賞まで、

いずれも助成によって書籍が刊行されて初めて表彰されることになったものである。

科研費出版助成による学術圖書の質の高さとともに、この助成の効果を端的に実証するものと言えよう。

②学界と社会への受容 先に社会や歴史による評価・選択と述べたが、それでは第二に、科研費出版助成図書はどれくらい学界や社会に受け入れられているのであろうか。

まず新聞や雑誌の書評や記事で取り上げられた数を見よう。〇二〇六年度に大学出版部では毎年六〇点弱の書籍を科研費出版助成によって刊行したが、昨年春の調査では、これらは各年平均一四〇件以上の書評や記事で取り上げられていた。これは学会誌・専門誌のみならず新聞や一般雑誌を含む数字であり、書籍が様々なレベルの媒体を通して学界や社会に浸透していくことに対応している。この点は、専門雑誌論文には見られない現象であり、書籍の大きなメリットである。

では、科研費出版助成図書はいったいどれくらい読まれているのだろうか。残念ながら読者の実数はわからないので、販売数を示しておこう。これも〇二〇六年度の大学出版部の数字だが、昨年春の調査では、学術図書一点あたり平均一〇〇部弱を発行し、平均六〇〇部強を市販していた（これはあくまで平均数であり、書籍によって多少少ない部数での出版もあれば、他方、多くの読者を得て増刷できたものもある。たんにその多寡によって出版の価値

が決まるものではないことは強調しておかねばならない）。これは、学術図書以外の一般書を基準とすれば少数数であり、出版助成の必要性をよく示しているが、それと同時に、一部で誤解されているように助成図書は著者の周辺だけで読まれているものでは決してなく、学界と社会にかなりの程度需要・受容されていることも明示している。

なお、学術図書が長期にわたって流通していくことを考えれば、一点あたりの販売数はもちろん、記事などで取り上げられる数も、今後引き続き増加していくと見てよい。

③幅広い研究（者）をカバー しかし、こうした制度は、一部の研究者だけに利用されているのではないだろうか。第三に、この点を検証しておきたい。

〇二〇六年度に大学出版部で科研費出版助成によって出版した学術図書について、科研費の申請代表者になった研究者の所属を調べたところ、約六〇の国公立の大学等の研究機関、約五〇の私立等の研究機関、その他（名誉教授や非常勤講師、所属なし等）が約二〇あった。これは、申請代表者だけの所属であり、複数の著者による書籍も多いため、研究者の所属の範囲はさらに広がる。つまり、国立のみならず私立等の研究機関に所属する研究者から、ポストを得ていない研究者や名誉教授にいたるまで、実に幅広い研究者の研究成果をカバーしているのであり、これだけ多様な研究者（や研究テーマ、本のタイプ）をカバーできる出版助成の制度は他にない。

また、今年度の大学出版部での限られた調査の範囲ではあるが、申請代表者の年齢層も三〇歳台・四〇歳台・五〇歳台・それ以上、の間で大きな偏りは見られなかった。

さらに、ここで数字を示すことはできないが、名誉教授の著作にその一端が現れているように、これら科研費出版助成による学術図書は、一〇年以上にわたる研究の成果を多数含んでいる。こうした長期の研究、そしてしばしば大部となる著作に対応してきたのも、この制度の重要な働きであった。

科研費出版助成削減の影響

このように科研費出版助成は大きな成果を上げてきたのであり、その削減が様々な影響を及ぼしていくことは明らかだが、上述の大学出版部協会が提出した要望書では、それを大きく①研究発表機会の狭隘化、②研究支援基盤の喪失化、③研究計画立案の不能化、の三つにまとめている。以下、それに即して若干言葉を補いながら見ていこう。

①この助成によって書籍として公刊されて初めて学界や社会で評価されることになった研究は多く、この制度の削減は、研究発表の道を狭められた研究者はもちろん、学界と社会に大きなマイナスの影響を及ぼすことになる。

とりわけ人文・社会科学にあつては、国際的に見ても、体系的な書籍の形に研究をまとめあげて初めてその研究が正当な学術的評価を受けるわけであり、また、社会や歴史

の評価・選択を受けるために書籍という形で研究成果を発信することの重要性は、今年一月に発表された文部科学省科学技術・学術審議会の「人文及び社会科学の振興について」の最終報告でも強調されているところである。

人文・社会科学に限定せずとも、学知の体系的な集積である学術図書は、(特に自然科学系の)研究成果の簡潔な速報を旨とする雑誌論文などは性格を異にし、多くは執筆の過程自体が研究の体系化の過程でもあり、他方、より長期的な受容の過程をもつ(場合によっては改訂をへながら)。そして学術図書の読者は、その主題に関する専門研究者を中心としながらも、学術図書が通常の書籍と同様に流通することによって、いっそう幅広いものとなるのである。

②この研究の体系化過程＝書籍の執筆過程と研究成果の受容過程＝書籍の普及過程に大きな役割を果たすが、学術出版社である。学術出版における編集活動は、完成した研究成果をたんに印刷・刊行するにとどまらず、その手前の研究段階から関与することが多く、書物の方向性や構成、草稿の検討など、研究者＝著者の様々な相談にのり、研究を支援するものである。なかでも、しばしば長期にわたる大部の体系的な学術図書の執筆は、それ自体研究の重要な部分であり研究の仕上げでもあるため、それに対するサポートの役割は大きいと考えられる。また学術図書であつても、いやそうであればなおのこと、一人でも多くの読者に開かれた表現をとる必要があり、そのためにも編集活動は

不可欠なのである。ところが、このようにして完成した研究成果Ⅱ著作が出版助成を得られず公刊の見通しが立たなくなれば、編集活動を通じた研究のサポートは不可能になる。それは、研究を支える重要な基盤の一つが崩壊することにつながり、日本の学術と文化に多大な損失をもたらすことになる。

しかも学術出版の役割は、こうした編集活動に限定されるものではなく、長期にわたる研究成果の普及・流通も重要な機能の一つである。しかし、これはそもそも優れた著作が刊行されなければ始まらず、たとえ刊行されたとしても助成を得られず不十分な形（内容を削減するなど）や高価格の書籍となれば、学術的な評価という点からも社会への受容という点からも、大きな障害をもつことになる。

③さらに科研費出版助成は、あらゆる研究者に開かれている点や、大部・大型の出版計画にも対応しうる点、また長期にわたる（単年度や数年度ではなく）研究の成果を十全な形で公開できるなどの点で優れた制度であり、テーマや規模や著者の資格要件など制約の多い他の助成（民間財団や一部の研究機関の）では置き換えられない。むしろ、科研費出版助成という基礎的な制度が十分に機能しているこそ、こうした他の助成も相補的な関係に立つことができるのである。したがって、科研費出版助成の削減によって、大半の研究機関に属する研究者やまだ一定のポストについていない若手研究者の研究成果の体系的な発表、また、恵

まれた条件にある研究機関の研究者であっても大部・大型の研究成果の発表などが、厳しい制約を受けることは明白であり、事実そうなっている。このことは②で述べたこととも重なるが）研究計画の立案にまで影響を及ぼし、研究者が思い切った構想を打ち出すことを困難にするであろう。そのことの持つマイナスの意味は計り知れない。

科研費出版助成の必要性

以上、科研費出版助成削減の影響を三つに絞って見てきたが、削減の負の効果はきわめて大きく、あらためてこの助成の拡充（復活）を強くうったえずにはいられない。

最後に、科研費出版助成に関連してしばしば議論になる、書籍の形態と日本語による記述について、若干の言葉を費やしておこう。

①書籍の形態 学術の情報化・デジタル化が進む今日にあっても、紙媒体の冊子体による書籍には需要があり、学界においても社会においても重要な役割を担っている。このことは客観的な事実である。よく見られる、インターネットを中心とする多様な電子メディアの出現や、書籍一点当たりの販売数の減少といった現象を直ちに、紙媒体・冊子体の書籍の消滅に結びつける類いの議論は、しばしばあまりにも短絡的である。未来や人間の行為は常に予測しがたく、社会工学的なヴィジョンがそのまま実現した例はない。たしかに今後、紙媒体と電子媒体の併用がさらに進ん

でいくことは間違いないと思われるが、両者の役割の再編がどのようなになるかは不確定であり、しかもそうした再編は、社会の変化とともにしか進まない、時間のかかるプロセスである。確実に言えることは、再編の過程にあっても、紙媒体・冊子体の書籍の役割と需要は存在するし、他方、書籍がどのような形態をとろうとも、編集の過程や普及の過程に（こそ）は技量と手間暇を要するということであって、それゆえ學術図書には助成が必要だということである。

② 日本語による記述 現在、英語での発表、英文出版が奨励されており、実際、自然科学系では英文ジャーナルへの掲載を前提に論文が書かれることが多い。したがって、ここであえて英文による記述について言挙げするよりも、むしろ、日本語による學術書を不要とする意見に対してはつきりと異を唱えておきたい。

さて、あらゆる学知は、學術誌の査読システムの中で閉じてしまうのではなく、広く社会へと開かれるべきものである。そしてその社会の範囲や、それへの接続の仕方などを考えるかによって、書かれるべき言語は変わってくる。したがって、研究領域やテーマ、対象などに応じて、書かれるべき言語は異なる。いや、書かれるべき言語の組み合わせや比率あるいは状況が異なると言った方が正確であろう。英語での発表が奨励される場合が多々あるとしても、すべての研究者が常にそうする必要はなく、柔軟な役割分担があつてしかるべきである。また、多くの優れた学知は

何らかの形で日本語で（も）書かれることが望ましい。

具体例をあげるなら、いずれも助成図書である『日本の活断層』や『清帝国とチベット問題』のように、後の政策形成などの基礎となる認識・情報をもたらした書籍が日本語で書かれることのメリットは明らかであるし、『フラーレンの化学と物理』のように、新しい研究領域を体系化して提示する著作が日本語で書かれれば、日本においてその研究領域を活性化することも間違いない。

一般に自己と他者の歴史と環境（自然的・社会的）について、自国語によって学知を記述し、また読みうることの文化的・社会的意義は測りたいほど大きく、それは、何度も述べているように學術が社会や歴史の評価・選択を受けていく必要があるからでもあれば、學術の発展のための最大のスポンサーである国民に学知を開いておく必要があるからでもある。

詳述する暇はないが、国際的に見ても、特に同じ漢字文化圏のアジア諸国に翻訳される場合など、日本語による記述のメリットは小さくなく、おそらくこのことは社会というものを多重・多元的に捉えていく必要を示唆している。

いずれにせよ、我が国の學術においては、安易に英語のみ、あるいは日本語のみに記述を限定してしまうのではなく、言語的な二重性、いや多重性を生かすことが必要なのであり、そのことが生み出す（断絶をとまなう）循環的發展こそが、学問と社会の未来をきりひらくのである。

日本学士院賞と科研費出版助成

安藤隆穂 (名古屋大学教授)

はじめに・科研費出版助成と基礎研究

このたび平成二一年度(第九九回)日本学士院賞をいただくことができた。受賞作品となった『フランス自由主義の成立——公共圏の思想史』(名古屋大学出版会、二〇〇七年)は、日本学術振興会の二〇〇六年度科学研究費補助金研究成果公開促進費「学術図書」(以下、科研費出版助成と呼ぶ)の交付を受けている。地味な専門研究であり、科研費出版助成の制度がなければ出版は困難であつたらう。

理系文系を問わず、専門研究、特に基礎研究は、直接的な有用性を明示できない場合が多い。未知の領域への大胆な挑戦があればあるほど、それはかえって有用性との結びつきを見えなくする。人文社会科学分野では、基礎研究の主題は、長い歴史の物差しで見ても社会的意義が決まるものであつて、ほとんどの場合、現状で役立つようには見えない。むしろ市場的価値のないものをこそ、出版し

公表しておくことが必要なのである。私自身、今回の「授賞審査要旨」の中で、「日本からこそ発信できる獨創性をもつ」との評価をいただいているが、その「獨創性」を市場価値に結びつけるのは、不可能に近かつた。科研費出版助成制度の恩恵で、私は今回の受賞に至る基礎研究を続けてこられたといつても過言ではない。

科研費出版助成と私の研究の歩み

私の場合、受賞作品以前にも『フランス啓蒙思想の展開』(名古屋大学出版会、一九八九年)と『フランス革命と公共性』(編著、同、二〇〇三年)について科研費出版助成を受けている。前者は幸いにも、若手研究者の問題提起的成果として経済学史学会、社会思想史学会、日本一八世紀学会など複数の学会で高い評価を受けたのみならず、通例私が関与することの全くない分野からもコメントをいただいた。私の研究の見直しと再出発にとつて計り知れない恩

恵が、望外に広範囲にわたつてもたらされた。忘れ難い思い出は、病院勤務の医師から、私の著書でわずかに言及した思想家カバニスの議論について、現代医療にとつてもアクチュアリテイのあるもので参考になるとお手紙をいただいたことである。科研費出版助成を受ける著作は、一般に学界レベルで論議を呼び起こし学問の発展に寄与する場合が多いと考えられるが、社会への受容という面でも、直接的有用性にとられないからこそ可能になる質の高い知的刺激をもたらしているのではなからうか。

次の『フランス革命と公共性』も、人文系と社会科学系の研究者の共同作業の成果を編集したものであり、しかも学説としては相当異なる立場の諸論文を奇跡的に一冊にまとめた著作として好評をもつて迎えられた。どの論文も、各分野の地味な基礎研究であつて、単独著作として刊行することは難しいものばかりであつた。また、論文相互の対立点をあえてきれいにまとめず、むしろ対立の火花をそのままに残そうとしたが、それは、統一性のなさという印象にもつながりかねないものであつた。このような対立の学術の意味は、科研費出版助成制度におけるような専門的審査を経てこそ評価されるものであつて、一般には、市場価値の点から見ても、出版になじみにくいだろう。その意味で本書も、出版助成の恩恵によつて学術的貢献を果たすに至つた好例に数えることができよう。

科研費出版助成の意義

学術的に高い評価を受ける研究成果は、長い基礎研究の積み重ねの過程を経ている。その基礎研究は、将来的価値が不明であることが常であつて、効用性の観点からは無価値とされ、出版の機会もなかなか訪れない。科研費出版助成の制度は、埋もれてしまいかねないこのような貴重な学術研究に公表の機会を提供し、学問の発展とその社会への受容に貢献してきたのである。

しかし、科研費出版助成の意義はこれにとどまらない。さらに重要なことは、科研費出版助成が、高い質の学術出版事業を可能とし、これを通して著者と出版社双方の成長を促すことにある。

著者と出版社は、作品の計画と原稿の執筆段階から、綿密に連絡を取り、出版に向けての共同作業に入る。それが、学術書の場合、一般の出版に比べて早い段階から行われ、科研費出版助成の申請書類提出の数年前に始まることも多い。著書の構成と編集について、出版社側の担当者（編集者）からの助言や批判を受けることによつて、著者は、単独では得られない次元で思考することができ、社会の需要をよく知る編集者の鋭い指摘によつて、最終段階で研究の飛躍をなし得た経験は、多かれ少なかれ誰もが持つであろう。とりわけ科研費出版助成の制度を活用する場合には、市場価値による拘束から相対的に自由になるだけ、著者

と編集者は、学術的価値の創造に専心することができる。科研費出版助成はこのように、良質の研究を支えるだけでなく、優れた出版社を育てているのである。

著者と編集者との共同作業について、私の経験で見ると、とりわけ申請に先立つ出版計画と原稿執筆の時期が有意義であると思う。私はこれまで、多分野にわたって出版を手掛けた優れた編集者に恵まれた。彼らは、著者と同じ分野についてはもちろん、他の分野についても研究動向に感度の良いアンテナを張りめぐらしていた。彼らの意見によって、著者自身の研究を相対化し、研究の世界での立ち位置を確認することや、専門研究者仲間を超えたより普遍的な読者を意識して、著書の編成を厳しい吟味にかけることができた。出版助成決定後ももちろん、緊迫した共同作業は行われる。私の場合には、校正の段階でも編集者から、ジャーゴンの迂闊な使用を鋭く指摘され、論理運びについて反省させられた経験の特筆しておきたい。人文社会科学系の著作の場合、文体は思想を表す。最後に文体が定着に向かう時、私の例のように、編集者の助言から大きな恩恵を受けることが多いのではなからうか。その機会は、共同作業の時間も密度も濃い科研費助成出版の場合、通例とは比べものにならないほど頻繁に訪れるのである。

科研費出版助成を、狭い意味での出版支援とみなすべきではない。人文社会科学の分野で基礎研究を続けていく場合に、出版時の編集者との共同作業には、自然科学系の学

問の基礎的実験の作業に近い要素が入っていると見ることが出来る。将来性のある研究の発掘を目指す編集者の前で、著作を練り返し練り直す著者の作業は、自然科学でいえば、基礎実験を練り返すのに近い過程であるように思う。またそれは、編集者を仲立ちとする、著者の研究と社会との結びあいを問う作業でもある。つまり、科研費出版助成制度は、人文社会科学系の研究者にとって、自然科学の基礎実験を公的支援する制度に近い意味も持つのである。

日本文学士院賞と科研費出版助成

日本文学士院賞を受賞した人文社会科学系の研究のうち、三分の一以上が科研費出版助成の交付を受けているという。これは、受賞研究の多くが、なかなか評価の下しがない地味な基礎研究を長い年月にわたって積み重ねたものだからである。簡単に評価の確定し得ない基礎研究を、効用性の魅力を退けて忍耐強く続け、かつ公表の機会をうるには、科研費出版助成の支援が不可欠である。

こうした研究にとって、インターネットの発達によっても書物の出版の重要性はいささかも減じない。人文社会科学系の研究分野では、個別論文やインターネットによる情報を通じてよりも、一つの大きなまとまりをもつ著作＝モニュメントによる研究交流がいっそう重要である。それどころか、研究が細分化し、細かい情報がすさまじい速度で飛び交うインターネットの時代に入り、モニュメントによ

って研究の動向を大局的地点に立つて規定することの意義は、かえって増大している。

また、日本語による書物の出版も、学術研究の共通語が英語だと言わんばかりのグローバル化の波をかぶる中で、実はよりいっそう有意義となるだろう。私の研究を例に挙げれば、先にふれたように「日本からこそ発信できる獨創性を持つ」との評価を得た。私はその真意を、フランス語による思考のみによつては困難なフランス思想読解を行つたという意味に受け止めている。日本語による思考と表現によつてこそ解読できる、フランスの思想の性格と意義がある。逆にそれは、フランス本国ではかえつて困難な研究なのである。フランス思想研究を国際水準で見ると場合にも、日本語で本を出版するという過程を経てこそ可能となる学術国際貢献があることを見落としてはならないと思う。

これは、人文社会科学の分野においては、外国を対象とする場合であっても、日本語による書物の出版が、自然科学分野での実験による理論仮説の検証作業に類似した側面を持つという、前に述べた特徴の実証でもあるだろう。自然科学の発展が、忍耐強い実験の積み重ね抜きにあり得ないように、人文社会科学の発展は、母国語による書物の創造と出版を必要とする。自然科学における実験に直接的な有用性を求められないように、市場価値に直接なじまない人文社会科学の基礎研究は、科研費出版助成のような制度の充実を必要としているのである。

科研費出版助成制度の発展を願う

私の研究生生活を振り返る時、大きな恩恵を得た書物には、科研費出版助成を受けたものが圧倒的に多い。大学の長い歴史を持ち、学位論文の公表の制度も充実している欧米に比べ、日本では、学術研究公表の環境はいまだ整備されていない。科学費出版助成の制度は、日本の基礎学術研究を維持し発展させる、いわば命綱であったのである。

私自身、自らの著作が、そうした長期的かつ大局的次元で、学界の発展に貢献できることを望み、また、幅広い読者を経て、目先の有用性を超えたより深い次元で、社会に対しても知的貢献を果たすことができればと考えている。

偶然とはいえ、今回日本学士院賞を受賞した『フランス自由主義の成立』は、副題に「公共圏の思想史」とあるように、近代における自由な社会を実現する基礎が自由な公共圏の充実であり、かつその生命線が出版の文化にあることを論じたものである。一例を挙げれば、コンドルセはフランス革命の時代に文化資本の再配分の政策として、古今の政治経済学の古典を要約解説した叢書として『公人叢書』(一七九〇—九二年)を刊行した。科研費出版助成によつて優れた基礎研究の成果が出版されてきたことは、この『公人叢書』の企画を思わせる。日本の学問の力を維持し、かつこれを社会の共有財とするうえで、科研費出版助成をぜひとも長期的に充実発展させていっていただきたい。

自然科学学術成果の日本語出版と英文発信

井口正人 (京都大学火山活動研究センター准教授)

筆者は東北大学准教授の西村太志さんと共著で、二〇〇六年に京都大学学術出版会から『日本の火山性地震と微動』という書籍を出版することができた。これは科学研究費の出版助成をいただいて実現できたことであり、以前から火山性地震と微動に関して系統的にまとめた書籍の必要性を感じていた我々にとつてはありがたいことであった。

火山学は学際的な分野であり、地球物理学、地質学、地球化学、岩石学など様々な分野の研究を統合してまとめ上げられるべきものであるが、あえて火山性地震と微動にこだわったのは、日本ではこれまでに火山噴火により火山災害がしばしば発生してきたが、現状の火山活動を評価し、今後の噴火活動を予測する上で、約一世紀にわたる観測の歴史をもつ火山性地震の観測は最も有効な手法であり、火山災害の防止という観点から社会との関わりが深いからである。本稿では、『日本の火山性地震と微動』の日本語出版にいたった経緯と、それを世界に発信するための英文文化の

必要性について述べたい。

磐梯山が山体崩壊を起こし、鹿児島測候所に地震計が設置された一八八八年以降、日本では多くの火山性地震・微動の観測が継続的になされてきた。この地震計は、後に二十世紀に発生した我が国の最大規模の噴火である一九一四年桜島大正噴火に伴う地震を観測することになる。また、最初に火山性地震が観測により捉えられたのは一九一〇年の有珠山の噴火のことで、東京帝国大学の大森房吉教授が有珠山西湖畔に設置した地震計により多数の火山性地震や微動が観測された。戦後になり、桜島や霧島などに火山観測所が整備され、特に、昭和四九年に始まった火山噴火予知計画により、我が国の火山観測網は急速に整備されることとなった。火山性地震の震源は多点観測網により精密に震源決定されるようになり、震源のメカニズムもモーメント・テンソルやシングルフォースを用いて力学的に記述されるようになった。少しずつではあるが、その本質が次第に明

らかにされつつある。火山性地震・微動の発生には流体の動きが関与している。最も典型的なものは、爆発的噴火に伴って発生する爆発地震である。火山体に蓄積されたマグマの噴火開始直前から放出され終わるまでの過程は、マグマ本体やマグマから分離した火山ガスの動きにより説明できるようになった。噴火に至らなくても、地下での火山性流体の振動は様々な種類の火山性地震・微動を発生させることもわかってきた。筆者と西村太志准教授は、こうした最近の火山性地震と微動の研究のあらましをなるべく系統立てて、『日本の火山性地震と微動』という書籍にまとめた。本書は第一章で全体を概観した上で、第二章では観測システム、第三章で火山性地震と微動の分類、第四章で発生領域、第五章で発生機構、第六章で地震活動と火山活動について述べ、第七章では日本の主な火山ごとに火山性地震と微動の特徴をまとめている。

本書を執筆するにいたった理由は、火山性地震についての適当な日本語の教科書がないことによる。火山学についての優れた教科書がないわけではないが、多くは寄せ集めの百科事典である。百科事典的にまとめることが悪いことではない。火山学は学際的な分野であり、地球物理学、地質学、地球化学、岩石学など様々な分野の研究を統合してまとめ上げられるべきものだからである。しかし、火山学自体が発展過程にある学問分野であり、現在は、統合的にまとめられる段階にない。そうであれば、火山学の一分野

について部分的であつてもより系統的にまとめる必要があるのではないかと考えた。

火山性地震・微動は、その観測手法により日本の多くの火山において静穏期を含めた火山活動が最も多く記録されているからであり、その前兆的活動や噴火に伴う地震の研究は、火山噴火予測による防災面への応用から火山爆発のダイナミクスといった火山学の学術的問題など、幅広い課題に 대응する可能性を持つ。取りまとめられた教科書に頼り切る研究がよいはずはないが、少なくとも大学の学部や大学院の修士課程の学生に対しては取り付きやすい道を開くべきである。また、火山学は防災をとおして社会とのかかわりの深い学問分野である。火山噴火は時に、周辺に居住する住民に深刻な影響を与える。二〇〇〇年の有珠山噴火では周辺の住民約一万六千人が避難し、同年六月に始まった三宅島噴火では九月以降、三五〇〇人の島民が東京都本土へ避難を余儀なくされた。このような避難の判断をするのは国や自治体の防災関係者であり、学識経験者がそのような防災の場に積極的にかかわっていく必要は言うまでもないが、防災担当者も必要な基礎知識は身につけるべきである。そのような場合に、現在、進行している火山活動を評価するのに最も有効的に活用されてきた火山性地震と微動について日本語で記述したガイドブックが必要ではないかと考えた。こうして出版したのが、上記の書籍である。

しかし、そのような必要性は日本に限らない。一二九の活

火山を有するインドネシアではより深刻である。一八一五年のスンバワ島のタンボラ火山の噴火では約十万人が犠牲となった事例がある。最近では、二〇〇七年十月にジャワ島の東部にあるケルト火山で火山性地震の活動が高まった。ケルト火山は山頂に火口湖をもち、噴火によって度々泥流が発生し、多大な火山災害が発生している。一九一九年の噴火では、泥流の発生により五千人が犠牲となっている。現在、インドネシアの活火山の監視を行っている火山地質災害軽減センター(CVGHM)の元になる組織の発足のきっかけともなった噴火である。二〇〇七年以前では一九九〇年にも噴火が発生している。水蒸気爆発から始まり、巨大な噴煙柱を形成するプリニー式噴火へと成長していった。この噴火では放出された火山灰が家屋に積もり、その多くが倒壊した。二〇〇七年の火山性地震活動の活発化は新たな噴火活動を予見させるものであり、CVGHMは火山活動のレベルを最終的には最高レベルの四に上げ、火山周辺の住民約十一万人を避難させた。それは、一九九〇年と同様に巨大な噴煙柱を形成するプリニー式噴火の発生を予測していたからである。ところが、実際におこったのは火口湖の中での溶岩ドームの形成であった。阿蘇山中岳あるいは草津白根山湯釜の火口湖の中に突如として雲仙普賢岳の溶岩ドームが現れたと思えばよい。火山活動の評価と予測という観点から見れば、予測が外れたことになり、二〇〇七年噴火の場合、溶岩ドーム形成という噴出物の放出が火口内にと

どまる現象であったため、災害には結びつかず幸運なことであったが、逆に、予測よりも災害に直結する現象が起ることもありうることを意味する。火山では似たような噴火現象が繰り返し起こることはよくあることではあるが、一方で、直近の噴火現象が次の噴火の予測に役立たない場合があることは、玄武岩質溶岩の流出が予測されたにもかかわらず山頂のカルデラ陥没と多量の火山ガス放出に至った二〇〇〇年の三宅島噴火が語るとおりである。二〇〇七年のケルト火山の噴火も、直近の噴火現象から予測されるシナリオどおりには自然は動かなかった。

CVGHMには京都大学に国費留学生や国際協力機構の研究生として滞在した研究者が多数おり、火山活動の監視業務や評価の中核をなしている。インドネシア側機関が多数の留学生、研究生を日本に送り込んでくるのは、日本には火山噴火とそれに関連する火山性地震・微動の観測の歴史と経験があるからであり、それを自国の火山防災に生かしたいという願いからである。そのようなときに『日本の火山性地震と微動』に書かれている内容は、留学生への教育にも役立つはずであるが、日本語で書かれているために教科書となりえない。インドネシアからの留学生が来て、教育を行おうにも適当な教科書がないのが実情である。

もともと本書は、題名に「日本の」が付されているように、諸外国に対して日本の火山性地震の研究を紹介するのが一つの目的であった。世界には約千の活火山があるといわれ

ているが、わが国にはその約一割にあたる一〇八の火山が活火山に指定されており、日本はまぎれもなく火山国である。

噴火活動が活発であるし、レベルの高い研究もなされてきたことは諸外国の研究者にも広く知られているが、多くの文献は日本語で書かれたものであり、研究の実態は霧の中に隠れて見えないような状態ではないかと思われる。当然、日本における火山研究を見えるようにするためには英文で執筆する必要がある。しかし、これらの先行研究は過去に日本語で書かれたものであり、依然として霧の中に隠れていて見えない。それらに光をあてるためには、過去の研究についても触れたこの『日本の火山性地震と微動』を英文化し、諸外国から目に見える形にするのが早道である。

日本の火山研究者は、インドネシア以外にも、東南アジア、中南米、アフリカなどから多数の留学生、研修生を受け入れてきた。これらの開発途上国では火山噴火活動が活発であるだけでなく、社会的インフラの脆弱性ゆえに火山災害が拡大しやすい。留学生個人の学術的な興味のあるところではなく、日本政府と留学生を送りこんでくる相手国政府の目的は、火山災害の防止により、安心・安全な社会を築くこととである。社会基盤の整備により自然災害に対して強い社会をつくることは重要なことではあるが、それも自然災害の規模による。災害の原因となる自然現象が巨大であれば避難するしかなく、そのためには正確な予知に基づいて的確な判断を下す以外に道はない。火山噴火に関していえば、

火山噴火予知を行うことである。火山性地震と微動の研究は、火山噴火予知に対して最も実績のある分野である。留学生の教育で問題となるのは、英文書においても適切な教科書がないことである。論文集であったり、偏った部分だけを取り扱ったりしていることが多いからである。また、留学期間は限られており、留学が終了して本国に帰国してからが本当の意味での研究であり、実践への応用である。

これは留学生に限らず、彼らの本国において火山学を目指す学生や防災担当者にとって重大な問題である。継続的な研究を支援するにあたって英文書の教科書がないことは大きな痛手である。過去の大きな災害が発生した火山噴火は、東南アジア、中南米、アフリカと日本に集中している。先進国の中では狭い国土に火山と隣接して暮らさなければならぬ日本は、これらの国々と火山災害防止の問題点を共有できる唯一の国であり、世界の火山災害防止に寄与していく必要がある。災害防止には、多くのやり方があるが、教育という観点にたてば、英文書の出版をとおして貢献していくのが最もスタンダードな道である。先に、述べたように火山学自体が発展途上にある学問分野であり、出版をとおして世界的なレベルにおいても火山学の発展の一助になることが期待されている。また、日本語と並んで英文での出版を通して、諸外国、特に、発展途上国の研究者や学生の手助けができるのは、火山学に限ったことではないと思われる。日本政府としての力強い支援が必要である。

人文学、社会科学の振興と科研費出版助成

松本 功 (ひつじ書房)

学術分科会の報告

人文学、社会科学の分野の書籍の学術出版の役割については、科学技術・学術審議会学術分科会が出した「人文学及び社会科学の振興について（報告）」が、卓越した説明をしてきている。この報告書は、個々の学術出版社、学術書の編集者に留まらず、研究者や学術書を買っている書店の方々まで、広く学術出版に関わるものにとつてとても重要なものかつ画期的なものだ。ご存じない方のためにもこの報告書を紹介するところからはじめたい。

学問の評価のあり方としての書籍

文部科学省の設置した審議会である「科学技術・学術審議会学術分科会」は、平成一九年五月より、科学技術・学術審議会学術分科会学術研究推進部会の下に「人文学及び社会科学の振興に関する委員会」を設置し、人文学及び社会

科学の学問的特性、役割・機能等を踏まえた振興方策について検討を行って」きた。これまで検討された内容が報告書としてまとめられ、公開された。

報告書では人文学、社会科学の価値は、「他者」との「対話」とし「他者」との「対話」という知的営為は、単に、学者個人の問題にとどまらず、古今東西の様々な歴史や文化が前提としている諸「価値」を学ぶことを通じて、自身自身はもとより、自分自身が帰属している社会集団が前提としている諸「価値」を相対化するとともに、他の社会集団が前提としている諸「価値」を抽出した上で、両者を比較考量するための高次の「（認識）枠組み」を構築し、これを用いて異なる社会集団の諸「価値」を練り直していく」ことだとしている。これが人文学・社会科学自体の目的であるといえる。

報告書では、学問の評価のあり方として三つあると指摘している。一つめが、アカデミックな業界内的な評価、二

つめがアカデミックな業界の外も含んだ評価で、三つ目が歴史的な評価である。アカデミックな業界内の評価は、学会誌がその機能を果たすけれども、業界内の評価だけでは不十分であるとして、業界外も含んだ評価のために書籍という媒体が重要であると指摘している。アカデミックな業界の外も含んだ評価を意識している方は、研究者の中でも少数派だと思われる。もしかしたら、出版社の編集者でもそうかもしれない。該当部分を引用する。

人文学や社会科学の場合、書籍という形での研究成果の発信が、このような学術雑誌の査読システムの弊害を回避するための重要な研究成果の発信方法となる可能性を重く受け止めることが必要なのではないだろうか。

：評価軸が多元であることから、評価方法を複合的に用意しておくことが重要なのである。このように、「社会における評価」や「歴史における評価」にさらされるといふ意味で、書籍の意義を重く受け止めることが必要である。人文学や社会科学の場合には、学術誌の査読という「アカデミズムによる評価」、書籍による（アカデミズムの評価も含めた）「社会による評価」のバランスを確保することが重要と考える¹⁾。

この認識がなければ、他の業界、実験主体の理系的学問の領域の人々、学術政策に関わる官僚や議員、短期的な成果を重要視する人々に対して説明することは難しい。学術

研究のあり方とともに、学術出版社も含めた学術コミュニティのあり方についても、他者との対話が必要なのだ。このことは、この報告書自体のテーマでもあるし、報告書という人文学および社会科学の存在理由そのものである。

言語研究のジャンルにおいても、言語研究自体に客観的な真理があると考えていて、対話ということをあまり重要視せず、アカデミズム内部での議論だけでいいと考えるタイプの研究者の中には、学会雑誌があれば、書籍は不要であると考えている方もいる。しかし、たとえば、普遍性に強くこだわる生成文法も、アメリカの出版社が出版しなかったチョムスキーの処女作をオランダのムートン社が出版したことが、学の普及に大きな力があつたことを思い起こすことができる。書籍出版の意味はあるということだ。

学術出版の経済的規模

さて、学術書を刊行している出版社のことを学術出版社といういい方をし、多くの場合は、大学出版社局を含めて細かい小規模である。小さな規模の出版社が、学術出版を支えている。ひつじ書房は、言語学、日本語の研究、や英語や他の外国語の言語研究の書籍をもっぱら刊行しており、言語研究と関係して、言語政策、言語教育に関する研究書をも刊行している。それぞれ得意な分野があり、ここでは複数の出版社が競い合っている。

学術出版というものはどういう営みかということを概観

するために、学術書という「商品」の市場規模を説明する。学術書の大きさは、たいてい、A5判上製で、印刷部数は少ない。ひつじ書房では六〇〇部から八〇〇部の間である。日本語学というジャンルに近いジャンルで日本文学というジャンルがあるが、こちらはもう少し部数が少なく、三〇〇部〜四〇〇部という発行部数であると聞いたことがある。こういう数字は、ほとんど公開されていないが、数少ない公開している歴史・民俗学系出版社の岩田書院によると「岩田書院では日本史系の初版部数の標準が五〇〇部、民俗系が四〇〇部でしたが、今年になってから、それぞれ四〇〇部・三〇〇部に減りました。」とのことである。

一六〇〇部で八千円というひつじ書房で標準的なもので市場規模を考えてみる。六〇〇部×八千円であるから、本体価格の総定価は、四八〇万円ということになる。ひつじ書房の場合は、出版業界では取次と呼ばれる問屋に卸す掛け値が六七%であるので、卸値の総額は約三二〇万円である。研究書ではなく、一般書に近い存在である新書と比較してみる。新書は、一冊七百円という値段で、ある老舗の出版社は二万部以上だけれども、そうではないところでも一万部は刷っているそうだ。一万部で考えたと七百万円になる。先程申し上げた学術書の経済的な規模は、三分の二ということになる。もう一つ重要なことは販売速度である。刊行した部数がどのくらいの時期で売れるのかということだが、新書の場合、数か月といわれている。それに比して、

学術書は二年で売れ切れたら、幸運だ。二年という期間は三か月の八倍になる。経済的な規模が三分の二で期間が八倍ということは、一か月の経済的な規模としては、十二分の一である。経済的な規模が小さいから経営は困難を究める。

一方では規模が小さいということは、新たな可能性の発掘につながる発端を生み出すこともある。規模の小さな言論・発見を世の中に出す役割が出版にはあり、学術出版は、大きな、多数を占める主張を広めるのではなく、ささやかな小さな発端、新しい考えを世の中に送り出すことに意味がある。報告書にあるように、それが対話を生み出すということだ。たとえば、マルクスの資本論やフーコーの書籍でも初版は少部数だったらしい（このことが載っている文献を見つけれましたらお教え下さい）。決して、大きな部数ではないが、貴重な新しい考えを後押しするというところに出版の重要かつ貴重な点がある。部数の多くない書籍を何とか工夫して採算を採れるようにして、刊行していくということが学術出版社の重要な仕事であり、責任なのだ。

今の時代、それならば、インターネットで発信すればいいのではないかと思われるかもしれない。「ネットでの発信なら、可能性としては数万、数十万、数百万という数字が可能ではないのか。少部数の物に印刷費、紙代、製本代、編集費をかけるのは無意味なコストではないか」と。公開

ということと、ネットに書いておくことは同じではないということに気付いていない考えだ。自分のブログに書いただけで影響力を与えうるかどうか、少し考えればわかるだろう。ネット社会はさえずり機械のように声を発しているかも知れないが、だれかの声を聞こうとは思わない。本人以外の人（外山滋比古の『新エディターシップ』でいうところのミドルマンと呼ぶべき人間）が、応援することが不可欠だ。学術出版の「出版」はそういうミドルマン（ミドルパーソンと呼ぶべきか）の機能を持っているのではないだろうか。あるジャンルにそのジャンルに詳しい出版社があり、編集者がいるということは、その研究者以外の人々の代理人として、他者の視点から、その研究を見守っている人がいるということである。当該研究分野に関心を持つつつ専門家ではないという種類の人々がいることによって、その研究は、その内輪の世界から外に向かって伝播し、対話が起こる。それは、本人が、自分の場所に置いて置いしておくということとは違って、そこに媒介者としての編集者がいて他ジャンルとの対話、市民との対話ということが起こりうるということがある。

有力な支援手段として

先の報告書で人文学、社会科学の学問のテーマはまさに「対話」と「実証」を通じた文明基盤形成への道」ということであった。テーマが、対話であり実証であるのなら、

出版という機能はまさにそのモノズバリとしてリンクする。(アカデミズムの評価も含めた)「社会による評価」という機能を果たすことが書籍の機能であり、そういう書籍を世に出していくことが出版社・編集の役割である。時によつては、まだ、アカデミズムが評価していない考えを世に知らせるということもある。その経済的な規模は小さく、持続的に書籍を作り出していくということには困難が伴う。いわば、新書の十二分の一の経済的な規模の小さい活動が「社会による」評価を作り出す機能を充実させていく。そのための全てではないが一つの有力な支援手段が、科研費出版助成だ。様々なテーマが、議論され、研究されている現代、市民と学者、学者同士さえもが対話をするためには、ミドルな人々、ミドルな媒介がいつそう重要になってくるはずだ。もちろん、インターネットだって、ウィキペディアだって、使えるものはどんどん活用し、ここを込めて学術書を作っていく、というのが学術出版である。そのための重要な元手の一つが、研究成果公開促進費である。

(1)「人文学及び社会科学の振興について(報告)「対話」と「実証」を通じた文明基盤形成への道」科学技術・学術審議会学術分科会(2009)・

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/1246351.htm

(2)「裏だよっ」No.515 (2008.06) 岩田書院

ソウル国際ブックフェア「日本年」

足立 佑 (東京大学出版会)

ブックフェア会場、及びブースでのアテンド

ソウル国際ブックフェア(SIBF)は五月十三日〜十七日にソウル市内江南区のCOEX(韓国総合展示場)にて開催された。江南区はソウル市中心部から地下鉄で一時間程度場所、九十年代以降に再開発が進み、雰囲気はさいたま新都心に近い。COEXはホテル、地下のショッピングモール、カジノを併設する大型メッセである。SIBFは太平洋館、インド洋館(合計約一万四千㎡)で開催された。

SIBFの今年のテーマ国が日本であることもあり、会場の中心に大きく日本ブース(日本書籍出版協会、出版文化国際交流会を中心とした共同ブース)が設置されて、その周囲に個別ブース(日本聖書協会、ポプラ社、文藝春秋、CMC出版、二玄社、医学書院、大学出版部協会、日本児童図書出版協会、トーン)が配置されていた。

会場全体を見ると、児童書のスペースが会場面積の約半

分を占めている。韓国では児童書の市場規模が非常に大きく、一般書と雑誌を合わせた市場の三倍あるという現状を反映しているのだろう。東京国際ブックフェア(TIBF)では大きなスペースを占めている電子出版関係のブースはほとんどなく、インタネットの普及率・利用率では日本以上と言われる韓国のブックフェアとしては物足りなかった。とはいえ、少ない数ではあるが読書インタフェース、書誌情報データベースなどのブースはいくつか出展していた。

フェア全体は、プロフェッショナルの商取引というよりも一般向けの即売フェアという印象が強い。来展者は十代〜二十代の一般読者を中心に、親子連れ、社会見学の小学生も多い。韓国の版元は二〜三割引で販売していた。

日本共同ブースでは、文芸書の版權取引の商談もあったようだ。私がアテンドをつとめた十五日〜十七日の期間中、大学出版部協会のブースには韓国の出版社三社、書店一社、翻訳エージェンツ一社の来訪があったが、具体的な商談は

なかった。また、日本共同ブース、個別ブースともに書籍は展示のみで販売は行わなかったが、共同ブースの一角で韓国の大手書店、教保文庫が日本の書籍を販売していた。

韓国の出版市場では、日本の翻訳専門書の売行きは余り芳しくない。翻訳出版は多くて千部程度というから、専門書に限っては、著作権輸出ビジネスにかける労力やコストを考えると採算に合わないようだ。一方で小説(村上春樹、宮部みゆき、恩田陸など)やビジネス書・自己啓発書(勝間和代、本田直之、姜尚中など)の翻訳は盛んで、多くのヒットを生み出しているようだ。

フェア最終日、大学出版部協会のブースで展示されたすべての書籍を、出版文化国際交流会を通して国際交流基金ソウル日本文化センターに寄贈した。

ブックフェア会期中のセミナー

会期中に開催された二つのセミナーに参加した。

日韓出版ビジネスのビジョン 両国間の翻訳ビジネスの現状と課題についてのセミナーだった。前述の通り、韓国では文芸書・ビジネス書を中心に日本の書籍の翻訳出版が盛んである。一方、日本では韓流ドラマのノベライズなど特定のジャンルの書籍以外は翻訳が進んでいない。この非対称的な現状の打開のために、日韓双方で利用可能な書籍データベースを作成し活用すること、日韓共同出版に積極的に取り組むことなどの提言がパネリストからされている。

た。一方で、そうしたプロジェクトの原資をどうやって確保するか、あるいはそうしたプロジェクトがどの程度活用されるかについては否定的な意見も出されていた。

デジタル時代の図書館と出版界の協調 日韓の出版業界の現状、政府や公共図書館の動向についての発表があった。不況、紙価格の上昇、流通の動脈硬化などによる売上の落ち込みや、オンライン書店の急激な躍進とそれに伴うリアル書店の廃業増加という状況は日韓に共通している。一方で、韓国で書籍の値引き競争の過熱が大きな問題になっていることは、両国間の大きな違いといえる。韓国は時限再販制を採用しており、刊行から十八ヶ月以上たった書籍は自由な値引きが可能になる。また、刊行後十八ヶ月以内の書籍についても、10%以内であれば割引を認めている。こうした制度の下での価格競争は、書店の体力を削るのみならず、一部の大手書店からの仕入価格やバックマージンについての要求の拡大などによって出版社の負担も激増しているらしい。また、韓国では公共図書館の数がまだ不足しており、地方都市を中心に公共図書館の拡充を政府が検討しているという報告もあった。

*

今回のSIBFは私にとつて初の海外ブックフェア参加となった。この経験は、他国と比較しながら日本の出版市場を検証する視点を養う上でも有意義だったと思う。貴重な機会を与えて頂いた関係者の皆様に御礼申し上げます。

大学出版部ニユース

登記完了

七月三日金曜日、一般社団法人大学出版部協会定款、定時社員総会議事録、第一回理事会議事録、臨時社員総会議事録等の登記必要書類一式をそろえ、司法書士事務所に提出した。

五月二九日の定時社員総会での定款・一般社団法人への名称変更及び六月臨時社員総会人事の成田和男（北海道大）、大野友寛（慶應大）、竹中英俊（東京大）三氏の新理事選任は、全て登記事項。予想以上に時間を要したが、七月六日登記が完了した。

六月臨時社員総会は、「全社員の書面による同意書」での初めての試みであった。改めてご協力頂いた社員各社に感謝申しあげたい。

夏季研修会

既案内の通り恒例の夏季研修会が兵庫県・姫路市において開催される。今年は通常のケーススタディの他に、課題型ケーススタディを組み込んだ盛沢山の内容となっている。全国の会員諸氏が一堂に会し、直接意見を交わす貴重な機会。各位の積極的な参加を期待したい。

北海道大学出版会

▼中村太士／柿澤宏明編著「森林のはたらきを評価する」（A4判・四四一〇円）
森林の健康診断基準と健全な管理体制を提案。▼唐焯著「日本書紀における中国口語起源二字漢語の訓読」（A5判・七三〇〇円）
日本書紀に頻出する口語・俗語起源の漢語がその後どのように読解されてきたか。「北大文学研究科研究叢書13」

▼宇山智彦／C・レン／廣瀬徹也編著「日本の中央アジア外交」（A5判・一八九〇円）
豊富な資源と地政学的重要性で注目される中央アジアに対する日本外交のあり方を議論する。「スラブ・ユーラシア叢書6」
▼志田恭子著「ロシア帝国の膨張と統合」（A5判・三三六〇円）
中央政府の狙いとは。辺境統治研究の新枠組みを提示。▼シリーズ「現代社会と統計（全二巻）」
(1)杉森混一／木村和範／金子治平／上藤一郎編著「社会の変化と統計情報」（A5判・二九四〇円）
変容する現代社会を、統計はどのように写し取る事ができるのか。
(2)岩井浩／福島利夫／菊地進／藤江昌嗣編著「格差社会の統計分析」（A5判・三一五〇円）
我が国の様々な格差構造の実態を統計的に分析する。

弘前大学出版会

▼「津軽から発信！国際協力キャリアを生きる JICA編」
柑本英雄・佐藤菜穂子監修（A5判・一〇八頁・定価六九三円）
人生のキャリア作りへの「不安・迷い」から「決断」までのエピソードを詳細に記載。「就活」しながら「不安で迷いながら決断した」学生が送る渾身の書。



▼「国立大学法人弘前大学 仕事のしおり」
財務・施設担当理事 小川清四郎編（A4判・二八六頁・定価二、〇〇〇円）
「幅広い知識」と「志の高い意識」を持った専門職集団を育むため、本学の基礎的な業務内容を網羅。「意識改革に始まり、意識改革に終わる」自己改革の完結を目指して。



東北大学出版会

▼東北大学植物園編『青葉山植物園ガイドブック 植物園に行こう』（A5判、六五頁、一〇〇〇円）

開園五〇周年を迎えた東北大学学術資源研究公開センター植物園（青葉山植物園）の公式ガイドブック。オールカラーで楽しめる豊富な植物写真や、季節ごとの花暦、植物園スタッフが提案する「おすすめモデルコース」など同園の魅力を示すところなく収録。持ち歩きに便利なハンデサイズで、園内散策の面白さを大いに高める一冊である。

▼「女性百年」刊行委員会編『女性百年—教育・結婚・職業— いかに生きたか、いかに生きるか』（A5判、一七六頁、二九四〇円）

国立大学の中で最も早く女子学生を受け入れた東北大学。その門戸開放の理念と歴史を振り返り、現代社会の中で女性が置かれている位置について考察する。第1部は研究・行政・文学など各界で活躍する六名の女性を招いて行われた国際シンポジウムの講演録。第2部は日本と韓国の四人の研究者による女性研究の書き下ろし論文集。

流通経済大学出版社

▼「改訂版」交通学の視点 生田保夫著（A5判・三三〇頁・定価三六七五円）

人類生存の基礎に関わる地球環境問題を念頭に交通学の立場からどのように理解し、接近することが必要であるかを焦点に論じたものである。社会活動のグローバル化が進展する時代にあつては、交通量、交通距離は増大する一方であり、この地球環境問題に対して交通学の視点で問題を提起し、処方箋を明らかにすることが強く求められている。

科学・技術の進歩、産業・経済の発展、異文化の相互交流は膨大な資源需要を生み、地球資源環境を大きく変貌させて近未来の生活にさえ危惧を抱かせるようになってきた。こうした状況にあつて、人類は生存、社会のあり方に新たな選択が必要なことになり始めたのである。「改訂版」交通学の視点は3刷りを重ねた。内容については、交通の本質と意義、交通サービス、交通サービスの生産・供給と需要、私的交通、交通と市場メカニズム、運賃・料金の問題、交通と公共性—公共性基準の問題、地域と交通、交通と環境問題、交通政策である。

聖学院大学出版社

▼T・R・ライト著・山形和美訳『神学と文学—言語を機軸にした相关性』（四六判上製、定価五二五〇円）

「神学は言葉の意味に制限を課し、信仰内容の系統的な探求に向かう」。それに対して、「文学は言語が秘める創造的な可能性を追求する、しばしば破壊的な営みである」。

著者は、神学と文学をこのように定義し、神学と文学はその本質が矛盾するというアポリアを解決すべく、神学と文学の両者に共通する言語の能力に注目する。一方で、カール・バルト、バルタザールなどの神学者たちの神の言葉の神学の議論に従いつつ、他方では、ヤコブソン、リククール、フライ、カモードなど現代の言語哲学・文学理論を渉猟し、詩、物語、劇などの文学的方策によつて神学的真理を表現できることを証明する。

T・R・ライトはオックスフォード大学においてイギリス文学で学位を取得。文芸評論家。オックスフォード大学出版局から出ている『文学と神学』誌の編集委員を創刊号から担当。現在、ニューカッスル・アポン・タイン大学教授。

聖徳大学出版会

▼村井靖児著『音楽療法を語る―精神医学から見た音楽と心の関係―』（四六判・二八〇頁・二二〇〇円）音楽療法の第一人者である著者の、長年にわたる研究をベースにし、専門的でありながら一般の読者にもわかりやすい内容となっている。音楽療法は心身の病理に対してどのような効果をもたらすのか、音楽はなぜ心を癒すのか、心と音楽との関係を解き明かす。

▼森彪著『医における癒し―人間関係の形成のなから―』（四六判・二八〇頁・二一〇〇円）本書では小児科医の医療現場での経験をもとに、病氣と闘った人たちの実例が紹介され、著者との交流が描かれている。純粋な医学書ではなく、高度に発達した現代医学において人間的交流の必要性を強く訴えかけている。

▼高橋大海監修・Jソロイスト歌唱『親子で楽しむ唱歌集』（音楽CD・三四〇〇円）文部唱歌をはじめ、「春が来た」、「小さい秋みつけた」など文化庁「親子で歌いつこう日本の歌百選」にも選定された二・三曲を含む全四二曲が収録されている。

麗澤大学出版会

▼籠義樹著『嫌悪施設の立地問題―環境リスクと公正性―』（麗澤大学経済学会叢書）（二七三〇円）詳細な事例調査に基づき、嫌悪施設（廃棄物処理場・幹線道路・原子力施設等）の社会的に合理的な立地の在り方について分析・検討する。

▼倍和博編著『CSRマネジメントコントロール―企業と社会をつなぐ3つの仕組み―』（二六八〇円）（企業の社会的責任（CSR）をマネジメントのあり方から問い直し、CSR活動をモニタリングする仕組みやレポート・システムを実務者のために詳述。

▼小林道憲著『続・複雑系の哲学―21世紀の科学への哲学入門―』（二七三〇円）前著『複雑系の哲学』は、存在論を「生成」の立場から追求したのに対し、本書では、認識を行為と生成から捉える「複雑系認識論」を展開する。特に、理工系の学生のための格好の哲学入門書。



慶應義塾大学出版会

▼コンパクト版で読む福澤諭吉の本。『西洋事情』（二四七〇円）、『学問のすゝめ』（二〇五〇円）、『文明論の概略』（一四七〇円）、『福翁百話』（一四七〇円）、『福翁自伝 福澤全集緒言』（一六八〇円）。「読みやすい」と好評の福澤諭吉著作集全十二巻より、代表著作をコンパクトで携帯に便利な普及版として刊行。新字・新かなを使用し、ふりがなを多く施した読みやすい表記、わかりやすい「語注」「解説」が特長。

▼「オックスフォード ブリテン諸島の歴史」全一巻（P・ラングフォード原著監修／鶴島博和日本語版監修）。イングランド一国史観を超えて、ブリテン諸島諸地域の構造的関係を視野に、政治、経済、社会、文化の変容を描く画期的通史シリーズ。紀元前五五年―二〇〇一年までの「イギリス」像を、オックスフォードの知を結集し、再構築する。第一回配本は、第九巻・一九世紀／一八一五―一九〇一年（C・マシュー編／君塚直隆監訳、五〇四〇円）。イギリス帝国最盛期、急速な近代化によって変容していくブリテン諸島を多元的に捉える！

ケンブリッジ大学出版局

▶ The Cambridge Companion to Modern Japanese Culture

(Hardback 9780521880473, USD 90.00

Paperback 9780521706636, USD 29.99)

オーストラリア・ラトロップ大学の杉本良夫教授編集の新刊。一八六八年の明治維新から二十一世紀初めまでの約百五十年間について、日本のテクノロジー、食べ物、アニメ・漫画、学校、音楽などの様々な文化を、十九の側面から述べていきます。



▶ Japan Rising

(Hardback 9780521513852 USD 85.00

Paperback 9780521735162 USD 28.99)

二〇〇二年に五巻本の英語版で刊行された『特命全権大使米欧回覧実記』が抄録され、より広く、一般の方々にも入手しやすい一冊の本となりました。日本文化の海外発信の大きな架け橋となるであろう本書は、学生から研究者まで、全ての方々にお薦めです。

産業能率大学出版部

▼伊藤肇著『新装版 左遷の哲学』(二六八〇円)

人生においての障害や挫折を人はどのように乗り越えていくのか。昨今の厳しい経済状況だからこそ読み直したい一冊。

▼荒巻基文著『Perfectビジネスコミュニケーション』(二八九〇円)

これで仕事の達人になれる！日常生活や職場ですぐに活用・応用できる技術、フオーマット、手法をわかりやすく紹介。

▼東澤文二著『改善基礎講座』(一五七五円)

「もつとも簡単で、もつともわかり易い、もつとも効果的なノウハウ」を一挙公開。「手っとり早い改善活動」導入&チャレンジ」のツールとして最適な書。

▼塩見幸三著『「じやけん」の仕事改善術』(一一〇〇円)

5S活動(整理・整頓・清掃・清潔・躰)を続けるポイント、チェック機能、改善や工夫の仕方について、身近な事例や豊富なイラストを使ってわかりやすく解説。

▼坂本裕司著『考える営業』(一六八〇円)

知的生産性の高い仕事をめざすためのパフォーマンス営業のあるべき姿を解説。

専修大学出版局

▼二〇〇八〜〇九年度にかけて、「専修大学社会知性開発研究センター／言語・文化研究センター叢書」を刊行中。中世英文学の基礎資料・Manuscript研究などを基点に、中世ロマンズの翻訳、古英語としてのAnglo-Saxon語の変容過程を考察した、音韻・統語・文体研究の論考、英国の大学図書館、古文書館などに収蔵されている写本群にも光をあてたものである。

①松下周知他編『Anglo-Saxon語の継承と変容』(A5判・四六二〇円)

②池上忠弘訳『サー・ガウエインと緑の騎士』(A5判・三三七〇円)

③唐澤一友訳『イボミッドン伝』(A5判・二二一〇円)

④中尾佳之、松尾雅嗣、地村彰之編『A Comprehensive Textual Collation of TROLLUS AND CRSEIDE 写本と校訂本の比較研究』(A5判・五八八〇円)

⑤松下知紀編『A Glossarial Concordance to William Langland's THE VISION OF PIERCE PLOWMAN: The Z-Text 用語索引集』(A4判・七三三〇円)など。

大正大学出版会

▼小嶋知善編『久保田正文著作選—文学的証言—』(A5判 六九〇頁 八八二〇円)。多くの小説家、文学者を見いだし、一方で同人雑誌とその活動を評価し続け、菊池寛賞を受賞した久保田正文の著作を収録。単行本未収録の小説、短歌、評論、随筆、自伝などのほか、年譜、著作目録・解題等を付した。

▼野田文隆著『マイノリティの精神医学』(A5判 六七四頁 五七〇〇円) 精神科というマイナーな世界の中でもさらにマイノリティに属する人たちと多く関わってきた精神科医である筆者が、「こころ」(精神医学)と「文化」(多文化間精神医学)と「回復への支援」(精神科リハビリテーション)について論述する。

▼カール・ベッカー・弓山達也編『いち・教育・スピリチュアリティ』(A5判 三三〇頁 二八三五円) 教育学、宗教学等の専門家が、「こころの教育」「いのちの教育」について問題を提起する。

▼小峰彌彦監修『真言密教を探る』(四六判 三六八頁 一九九五円) 多種多様な面をもつ密教を、歴史・思想を中心に、日本文化に与えた影響等を論述する。

玉川大学出版部

▼ピーター・セルゲイン、J・エリザベス・ミラー著／大学評価・学位授与機構監訳／栗田佳代子訳『アカデミック・ポートフォリオ』(A5判・五七七五円) 教員評価と能力向上のツールであるアカデミック・ポートフォリオ。教育・研究や、大学の管理運営、社会貢献等のサービス活動の意義や背景を省察して、業績記録を作成する方法を詳述する。

▼日本高等教育学会編『高等教育研究 変容する大学像』(A5判・二八八五円) 近年の大学改革の過程で今まで大学が持っていた役割が失われるという事態が起こっている。大学の組織、財政、教職員、教育、研究のここ二〇年の動態から、大学の変容は何を意味し将来にとってどのような問題を孕んでいるかを考察する。

▼村田昇編著『道徳の指導法 第二版』(A5判・一八九〇円) 教育基本法、小中学学習指導要領の改正に対応した第二版。本書では、道徳教育のあり方を、公正な立場から全体的・本質的に解明し、実践への手がかりを提示したものである。大学や専門学校でのテキスト・参考書として最適。

中央大学出版部

▼中村達也著『さまよう経済と社会「時代の叫び」162冊』(三六七五円) 世紀の転換点をはさむこの十年、経済と社会が大きくなうねりをあげた。このうねりを「時代の叫び」として聞き取り、これから先の経済と社会を読み解くための道しるべとなる最良の書評集。

▼国本伊代著『メキシコ革命とカトリック教会』(四九三五円) 一九一〇年に勃発したメキシコ革命は、社会正義の実現と政治・経済・社会の近代化を遂行する過程で厳格な政教分離体制の確立を目指した。この国家の政教分離政策に抵抗した強大なカトリック勢力がどのように国家と対決し、最終的にどのように協調関係をとるに至ったかを検証した研究書。

▼黒須純一郎著『日常生活の漱石』(二三一〇円) 明治・大正期の臣民社会に、一市民夏目金の助として生きようとした漱石。その生き様を、多くの漱石研究を踏まえつつ探る。職歴・日常生活と病氣・神経症・子規との交遊・社会批評・江戸っ子ぶりという斜めから垣間見たユニークな漱石論。間違いなく、もう一度、漱石が読みたくなる。

東京大学出版会

▼甘利俊一監修『シリーズ 脳科学』（全6巻）完結

二二世紀は脳の世紀といわれ、脳科学は文字通り本世紀を代表する科学分野へと発展してきている。

脳は、もつとも複雑で巧妙に作られた生体器官である。その成り立ち・働きを理解するためには生物学・医学・心理学などだけではなく、情報科学や言語学などまで含めた、幅広い学問分野を結集することが必要である。しかし、その広範さゆえに、この分野を一望できる概説書はなかなか見当たらない。

このようななか、脳科学の一定の体系付けを試みて編まれたのが本シリーズである。もちろん広大な脳科学の領域のすべてをカバーしきれているわけではないが、この分野を概観するには最適なシリーズといえるだろう。

①脳の計算論 深井朋樹編、②認識と行動の脳科学 田中啓治編、③言語と思考を生む脳 入来篤史編、④脳の発生と発達 岡本 仁編、⑤分子・細胞・シナプスからみる脳 古市貞一編、⑥精神の脳科学 加藤忠史編（各巻三三六〇円）

東京電機大学出版局

▼日本Mathematica ユーザ会編著『入門 Mathematica [決定版]』（A5判／三〇四五円）MathematicaはC言語など一般的なプログラミング言語に比較して多様な道具が提供されており、高いレベルでのプログラミングが可能である。

本書は数学・教育・医学など、多様な分野でユニークな活動をしている複数のパワーユーザーによって執筆された、Mathematicaの入門書である。様々な創造的活動にMathematicaのプログラミングを役立てることができよう。

▼廣田幸嗣他共編著『電気自動車の制御システム』（A5判／三二五〇円）二次電池の急速な進歩や回路実装の小型化・高密度化、その後に続く高エネルギー化により、電気自動車や家庭用ロボットなどのモバイル製品（移動体製品）が生活の場で身近になるうとしている。

本書はモバイル製品の代表である電気自動車のモデリングを軸にした、制御システム設計論に関するものである。将来の新製品創造への一助になることを目的として、広い技術分野にわたってまとめられた一冊である。

東京農業大学出版会

▼『レムール―マダガスカルの不思議なサルたち―』淡輪俊監修、宗近功編著「レムール」と「マダガスカル」の二つの耳慣れない言葉がタイトルとなっている。レムールとはキツネザルのこと。マダガスカル島は日本の一・六倍の広さをもつ。そこに八十八種にも及ぶ繁栄振りというから驚きだ。さらに新しい種も発見されつつあるという。レムールの写真は、写真家 長野俊彦氏の独壇場である。

平成二十一年三月／A4変形判
一三九頁／税込価格三七八〇円



東京農工大学出版会

▼「人が学ぶ イヌの知恵」林谷秀樹他著（B5判・一六四頁・一四七〇円）（税込み）

今から四万〜一万五千年前にオオカミを祖先として人が家畜化したイヌは、長い年月をかけて、様々な性質をもつ多様な犬種が作り出された。ところが人は、イヌと長い間暮らしてきたにもかかわらず、意外とその性質を理解していない。そこで本書では、こうしたイヌを様々な角度から紹介している。なぜイヌは、食べ物で咀嚼しないのか、なぜイヌは、食べ物に登れないのか、なぜタマネギを食べると貧血を起こすのかといった体の仕組みや機能だけでなく、排便しても土をかけて隠さなかったり、人が留守の時にいたずらをする理由など、普段感じている疑問に対して東京農工大学の獣医学科の教授を中心にやさしくまとめています。



法政大学出版局

▼G・スタイナー／龜山健吉訳『パベルの後に』（下、六三〇〇円）現代随一の批評家が文化史、哲学史の沃野を渉猟しつつ取り組んだ「翻訳」論の古典。人文学の必読書の上下巻が、ついに完結。

▼J・ハーバーマス／大貫敦子他訳『引き裂かれた西洋』（三五七〇円）カントの永久平和論の構想と国際政治史を手がかりに、コスモポリタンの憲法秩序に向けての理論的・歴史的条件を考察する。

▼R・A・ダール／飯田文雄他訳『政治的平等とは何か』（一八九〇円）現代政治学を牽引する著者が、生のあり方の根本的な問い直しに始まり、真に平等な社会の実現に向けてのシナリオを描く。

▼北美幸著『半開きの「黄金の扉」』（三三六〇円）二〇世紀初頭に高等教育機関における「平等」を求めて闘ったユダヤ人のすがたを通して、彼らの平等観やアメリカ社会の統合の理想像を探る。

▼G・シヨローム／石丸昭二訳『サバタイ・ツヴィ伝』（上下、一五七五〇円）ユダヤ学の奉斗シヨロームが、一七世紀のメシアニズム運動に無類の作用を及ぼした人物の異端的生涯を再構築する。

武蔵野大学出版会

武蔵野大学では、平成二〇、二一年度に学部改編により政治経済学部、環境学部が発足。新設二学部関連書籍を紹介する。

▼矢内秋生著『風土的環境観の調査研究とその理論―科学的環境観から風土的環境観へ』（A5判／二六二五円）朝鮮半島まで含む環日本海地域沿岸の気象に関する伝統的呼称の実態調査から地域の風土的環境観を抽出、各地に伝わる災害リスク軽減の伝統的な知恵と環境データを結びつけた研究。

▼河津優司監修『環境デザインの試行』（B5変形判／三九九〇円）新宮晋、宮城俊作、安田幸一、北川フラムら十一人の時空をデザインするトップランナーが環境に対する自らの営為と試行を語る。

▼永田尚三著『消防の広域再編の研究―広域行政と消防行政―』（A5判／二六二五円）戦後、市町村に基礎を置いて整備された各地の消防本部。今、総務省消防庁主導で都道府県単位を視野に入れた広域消防本部へと「消防版平成の大合併」が進行中。火事、災害、救急の際の救援の手は、どこからどのように届くのか？最新の調査・分析による研究。

武蔵野美術大学出版局

▼白石美雪著『ジョン・ケージ 混沌ではなくアナキー』（A5判、三三〇頁、三三六〇円）

かつてジョン・ケージは時代の寵児であり、アイコンでもあった。ケージ没後二〇年を経て、いまやケージは一つのジャンルである。マース・カニングハム・ダンス・カンパニーとのコラボレーション、デュシャンら多くの美術家との交流、フルクサスの揺籃期に果たしたケージの役割など、その軌跡はあまりにも多岐にわたり、私たちは時々ケージが音楽家であったことを忘れそうになる。だがケージはあくまでも音楽家として語られるべきだろう。ケージは驚くほど真剣に純朴に、音楽の自由闊達なコミュニティションと楽しさを求め、そして多くの作品が生まれた。本書は、ケージ作品の詳細な分析と同時に、ブラックマウンテンカレッジやストーリーポイントなど、ケージと友人たちが生きた場所と時代を生き生きと描き出す。巻末に、超レアな情報を満載した三五〇曲の作品表を掲載。

明星大学出版部

新テキストから。

▼『教育行政と学校経営―改正教育基本法下の公教育制度の理念と構造』樋口修資編著 二八三五円

▼『現代教育改革に立つ教育の原理』明星大学教育原理研究会編 二五二〇円

▼『現代教育課程入門―知識基盤社会を生きたための学校教育を目指して』鯨井俊彦・青木秀雄・林幹夫著 一六八〇円

▼『第2版 教師論―教職とその背景』森下恭光編 一六八〇円

▼『第3版 道徳教育の研究』森下恭光・佐々井利夫著 一八九〇円

▼『第2版 特別活動の展開』鯨井俊彦編 一五七五円

▼『生涯学習概論』神山敬章・高島秀樹編 二六二五円

▼『第2版 子どもの発達と環境―児童心理学序説』塚田絃一 二四一五円

▼『みるみるわかる心理アセスメント』学ぶ・使う・活かす 三〇〇〇円

▼『黒岩誠・野口和也編』

東海大学出版会

『夏の海辺で読みたい本、三冊』

▼『サンゴ礁のちむやみ』―生態系サービスは維持されるか―土屋 誠・藤田陽子著（A5変型判・二九四〇円）サンゴ礁のちむやみ「肝（心）痛む」を学ぶ。

サンゴ礁からの恵みの持続的な利用のためのモデルを提言する。

▼『珊瑚の文化誌』―宝石サンゴをめぐる科学・文化・歴史―岩崎 望編著（A5判・三九九〇円）コラルロードを巡る十二話。

▼『ウニ学』本川達雄編著（A5変型判・五〇四〇円）棘皮動物のミラクルワールド2。ウニの基礎知識から最新の研究成果までのウニの参考書。姉妹編『ヒトデ学』とあわせて読めば、棘皮動物全体がわかる。



関東学院大学出版会

▼『ジェイ・H・モーガン—アメリカと日本を生きた建築家』水沼淑子著（二六二五円）丸ビル建設のために来日し、関東大震災後の横浜で活躍したアメリカ人建築家ジェイ・H・モーガン。本書は謎に包まれたモーガンの人生と作品について明らかにしたものである。



▼『実験音声学のための音声分析』平坂文男著（二七三〇円）音声の研究において比較的良く使われている音声分析の幾つかの手法について、初めて音声分析の手法を学ぶ者でも容易に理解出来るように、その原理を出来る限り平易に解説。



名古屋大学出版会

科研費出版助成を得て刊行した図書に關しまして、昨年から今年にかけて多数の受賞がありましたので、特集にちなんで紹介させていただきます。

▼安藤隆穂著『フランス自由主義の成立—公共圏の思想史—』第九九回日本学士院賞▼宮紀子著『モンゴル時代の出版文化』第五回日本学士院学術奨励賞▼ジェラルド・グロマー著『醫女と醫女唄の研究』第一九回小泉文夫音楽賞・第二五回東洋音楽学会田邊尚雄賞▼眞壁仁著『徳川後期の学問と政治—昌平坂学問所儒者と幕末外交変容—』第三〇回角川源義賞・第六回徳川賞▼テオドル・モムゼン著 長谷川博隆訳『モムゼンローマの歴史』（全4巻）第四五回日本翻訳文化賞・二〇〇八年度ドイツ連邦共和国レッシング翻訳賞▼西澤泰彦著『日本植民地建築論』二〇〇九年日本建築学会賞▼須藤功著『戦後アメリカ通貨金融政策の形成—ニューデールから「アコード」へ—』第一五回連合駿台会学術賞▼浅野豊美著『帝国日本の植民地法制—法域統合と帝国秩序—』第三八回吉田茂賞・第二五回大平正芳記念賞

三重大学出版会

▼『語彙 表現（上級レベル）☆エッセンスⅠ、Ⅱ』藤田昌志著 変型B5版、八七頁（Ⅰ）。八五頁（Ⅱ）。定価各一五五円。日本語能力試験一級レベルの語彙、表現各一〇八〇（Ⅰ）、一〇二〇（Ⅱ）を取り扱う。見開き頁の左肩で各課の語彙、表現について既習の語彙・表現を用いて定義および説明し、右頁でその語彙、表現を使用した読解文を示して、学習効率を飛躍的に増大させた。留学生対象日本語習書。自習も可。目次▼『語彙 表現（中級レベル）☆エッセンスⅠ、Ⅱ』について▼各課一—三二六（Ⅰ）、一—三四（Ⅱ）（各課見開き二頁）▼『索引』日本語学習者用の日日辞典教材集であるが、語彙・表現のレベル、定義、グラデーションなど、日本語母語話者が見開いても興味深い。

■日本修士論文賞、応募37作品。 主要応募大学 法政大学大学院5名、神戸大学大学院4名、慶応大学大学院3名、早稲田大学大学院3名、名古屋大学大学院2名、東京大学大学院2名、北海道大学大学院2名。 審査中。

京都大学学術出版会

▼『古代ギリシア・ローマの哲学』D・セドレー編著 内山勝利他訳（五七七五円）哲学の誕生から古代哲学の終焉まで、ギリシア・ローマ哲学のあらゆる問題、文学・科学・宗教との関連など一冊で網羅する。哲学の専門知識のない読者にも理解できるように、よく配慮された構成をとっている。ケンブリッジ・コンパニオンシリーズの一冊。

▼『学術選書』『災害社会』川崎一朗著（一八九〇円）地震予知や免震工学は劇的に進歩した。しかしそれだけで災害は防げない。耐震補強を受けられない貧困、いたずらな投資による防災無視の再開発：東海・東南海地震に備え、防災技術を活かす現代日本の在り方をめざす。

▼『線形代数』西田吾郎著（二六二五円）ベクトルや行列は物理や工学においても重要な道具となるが、その使い方をマスターするには理論的な背景をつかみつつ、豊富な演習をこなすことが有効である。複素数や多項式の解説を付すとともに、より高度な数学への準備として重要な行列の指数関数やテンソル積までとり入れた、大学数学入門の決定版。

大阪経済法科大学出版部

▼『刑事弁護士が語る裁判員裁判―ナニワの法廷から―』村下博・山口健一・岩村等編集（定価一五七五円）

▼公開講座「地域社会と法」は刑事弁護の第一線で活躍されている大阪弁護士会所属の九名の弁護士によるリレー形式の講義で、学生とともに多数の八尾市民も熱心に聴講した。

▼和歌山カレー事件を始とする弁護士自身が体験された弁護活動にもとづいて語られた講義は、非常に生々しく具体的にあり、極めて説得力に富む内容となった。

▼講義の全体を通じて強調されたのは、刑事裁判で被告人は、裁判の出発点において無罪が推定されているわけで、証拠をもとに検察官によって有罪が十分に立証された時に始めて被告人が真犯人であると宣告されるということである。

▼五月二日から裁判員制度が施行された。市民の常識が刑事裁判の現場に導入され、刑事裁判手続の問題点が改善される可能性が生まれようとしている。

▼本書は、この公開講座の内容をまとめたもので、裁判員裁判のよりよき運営を願って刊行された。

大阪大学出版会

▼志水宏吉『力のある学校の探求』（A5判・並製三〇九頁・三〇四五円）「力のある学校」とは、欧米の「効果のある学校」論をもとに、日本での展開を跡づけたもので、「そこに関わるすべての人がエンパワーされる学校」の意味。「力のある学校」論を様々な角度から理論的に分析。いま、教育と学校の希望を熱く語る。▼大阪大学総合学術博物館叢書「映画『大坂観光』の世界―昭和十二年のモダン都市」A4判・並製・九六頁・二二〇五円）戦前の観光映画「大坂観光」に映し出された風景に従いながら水都大阪の重要テーマ見え隠れする都市問題も取り上げる。

▼大阪大学新世紀レクチャー・太郎丸博著『若年非正規雇用の社会学』階層・ジエスター・グローバル化（四六判・並製・二〇七頁・二二〇五円）アメリカに発する金融危機は日本を直撃し、非正規雇用者の労働・生活条件は一段と深刻さを増している。著者は、社会学者の立場から戦後六〇年の日本の若者の雇用・労働条件を分析。普遍・特殊な現象をも論じ、社会階層論、ジエスター論、社会ネットワーク論などが援用される。

関西大学出版部

- ▼吾妻重二著『宋代思想の研究』(A5判・四二〇〇円) 中国宋代思想を儒教や道教、仏教から照射した論文集。キーワードとなる人物や文献、事項について、通説に訂正を迫る知見を実証する。
- ▼水野一郎編著『上海経済圏と日系企業』(A5判・三三六〇円) 本学三研究所(経済・政治、法学、東西学術の各研究所)連立型研究における最初の研究成果。経済、経営、会計、社会の各専門分野から、上海経済圏と日系企業の動向を解明。
- ▼富田英典著『インティメイト・ストレンジャー』(A5判・三五七〇円) 現代人の新しい人間関係を通信メディアと社会の関係から描き出し、これらから生じる問題を分析し、「複合現実社会」の登場と「社会的迷彩」について論じる。
- ▼橋本征治編著『海の回廊と文化の出会い』(B5判・四二〇〇円) 「東西両洋」に象徴される世界の諸文化交流の道筋として「海の回廊」が浮かびあがる、その諸相に文化・歴史・地理・経済の視点から迫る。

関西学院大学出版会

近刊

- ▼赤坂 真人著
『社会システム理論生成史』(A5上製・一七八頁・定価三九〇〇円)
- ▼前原 澄子著
『Festive Romances in Early Modern Drama』(A5上製・一六四頁・定価三九九〇円)
- ▼前田 博美・長尾 真理著
『子供に教える大人が初歩から学ぶ英語』(B5並製・一三二頁・予価一九九五円) 好評既刊
- ▼国際連合広報局著／八森 充翻訳／関西学院大学総合政策学部発行
『国際連合の基礎知識』(A5変並製・五六六頁・定価二五二〇円)
- ▼宮西 正宜・茨木 俊秀編著
『現代数理入門』(A5並製・二八六頁・定価二九四〇円)
- ▼石原 俊彦著
『CIFPA—英国勅許公共財務会計協会』(A5上製・二九六頁・定価三七八〇円)

九州大学出版会

- ▼高原朗子編著
『軽度発達障害のための心理劇—情操を育む支援法—』(A5判・二七三〇円) 発達障害児・者の可能性を引き出す心理療法の理論と実践例の解説。保護者、関係者必読の書。自閉症・アスペルガー障害、学習障害児・者にも応用可能。
- ▼E・ヘルプマン／大住圭介 他訳
『経済成長のミステリー』(A5判・二九四〇円) アダム・スミス以来の経済学の重要な研究テーマである経済成長の問題について、膨大な理論的・実証的研究の分析を基に平易な言葉で解明を試みる。
- ▼G・A・フアイン／住田正樹 監訳
『リトルリーグの社会学—前青年期のサブカルチャー—』(A5判・三九九〇円) アメリカのリトルリーグチームについて参与観察やインタビュー調査を通して、前青年期の少年たちの社会化過程を解明したエスノグラフィ研究の名著。
- ▼田中理絵
『新装版 家族崩壊と子どものステイグマ—家族崩壊後の子どもたちの社会化研究—』(A5判・三三六〇円)

一般社団法人 大学出版部協会賛助会員

【50音順】2009年7月31日現在

株式会社朝日新聞社	〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2
亜細亜印刷株式会社	〒380-0804 長野県長野市大字三輪新屋1154
株式会社アベル社	〒162-0825 東京都新宿区神楽坂2-19 銀鈴会館408
尼崎印刷株式会社	〒661-0975 兵庫県尼崎市下坂部3-9-20
王子製紙株式会社	〒104-0061 東京都中央区銀座4-7-5
株式会社大森印刷	〒105-0003 東京都港区西新橋3-17-1
岡本出版発送株式会社	〒353-0001 埼玉県志木市上宗岡3-16-2
カクタス・ジャパン株式会社	〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町2-1-1 アスパ日本橋オフィス
城島印刷株式会社	〒810-0012 福岡県福岡市中央区白金2-9-6
株式会社京都学術振興会	〒605-0009 京都府京都市東山区大橋町88-1 辻野ビル2F-A
株式会社クイックス東京	〒102-0073 東京都千代田区九段北4-1-13 ニュー原鉄ビル5F
港北出版印刷株式会社	〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7
三松堂印刷株式会社	〒101-0065 東京都千代田区西神田3-21 住友不動産千代田ファーストビル南館14階
三美印刷株式会社	〒116-0013 東京都荒川区西日暮里5-9-8
三立工芸株式会社	〒101-0061 東京都千代田区三崎町3-2-10 寺西ビル3F
三和印刷株式会社	〒381-2226 長野県長野市川中島町今井薬師堂1822-1
信濃印刷株式会社	〒102-0072 東京都千代田区飯田橋4-1-11
新日本印刷株式会社	〒162-0801 東京都新宿区山吹町342
株式会社鈴木製本所	〒112-0014 東京都文京区関口1-17-5
大同印刷株式会社	〒849-0902 佐賀県佐賀市久保泉町上和泉1848-20
ダイニック株式会社	〒105-0012 東京都港区芝大門1-3-4 ダイニックビル7F
株式会社太洋社	〒501-0431 岐阜県本巣郡北方町北方148-1
株式会社竹尾	〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-12-6
土山印刷株式会社	〒601-8305 京都府京都市南区吉祥院宮ノ東町7
宗教法人天然寺	〒204-0021 東京都清瀬市元町1-4-5-711
株式会社東京弘報社	〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-34
株式会社とうこう・あい	〒104-0061 東京都中央区銀座8-11-11
株式会社日本経済新聞社	〒100-8066 東京都千代田区大手町1-9-5
萩原印刷株式会社	〒112-0004 東京都文京区後楽2-21-12
株式会社博報堂	〒108-0023 東京都港区芝浦3-4-1 グランパークビル17F
株式会社平文社	〒170-0005 東京都豊島区南大塚2-35-7
宗教法人法界寺	〒287-0003 千葉県香取市佐原イ-1057
株式会社堀内印刷所	〒335-0034 埼玉県戸田市笹目3-11-5
株式会社毎日新聞社	〒100-8051 東京都千代田区一ツ橋1-1-1
株式会社遊文舎	〒532-0012 大阪府大阪市淀川区木川東4-17-31
株式会社読売新聞東京本社	〒100-8055 東京都千代田区大手町1-7-1
株式会社ライトコミュニケーション	〒101-0047 東京都千代田区内神田3-2-8 COI内神田ビル3F
渡辺印刷株式会社	〒152-0031 東京都目黒区中根2-7-1

一般社団法人大学出版部協会は、私たちの活動をご理解・ご支援下さる皆様による「賛助会員」制度を設けています。ここに趣旨にご賛同下さり、ご支援頂いている各社様をご紹介しますことができます。なお「賛助会員」に関するお問い合わせは協会事務局までお寄せ下さい。

一般社団法人大学出版部協会 加盟出版部一覧

北海道大学出版会

〒060-0809 札幌市北区北9条西8丁目 北海道大学構内
TEL 011-747-2308 FAX 011-736-8605

弘前大学出版会

〒036-8560 弘前市文京町1番地 弘前大学附属図書館内
TEL 0172-39-3168 FAX 0172-39-3171

東北大学出版会

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 東北大学構内
TEL 022-214-2777 FAX 022-214-2778

流通経済大学出版会

〒301-8555 龍ヶ崎市平畑120
TEL 0297-64-0001 FAX 0297-60-1165

聖学院大学出版会

〒362-8585 上尾市戸崎1-1
TEL 048-725-9801 FAX 048-725-0324

聖徳大学出版会

〒271-8555 松戸市岩瀬550
TEL 047-365-1111 FAX 047-363-1401

麗澤大学出版会

〒277-8686 柏市光ヶ丘2-1-1
TEL 04-7173-3320 FAX 04-7173-3154

慶應義塾大学出版会

〒108-8346 港区三田2-19-30
TEL 03-3451-3168 FAX 03-3451-3124

ケンブリッジ大学出版局

〒101-0054 千代田区神田錦町1-10-1 サクラビル1階
TEL 03-3291-4068 FAX 03-3219-7182

産業能率大学出版部

〒100-0005 千代田区丸の内1-7-12 サビアタワー9階
TEL 03-6266-2400 FAX 03-3211-1400

専修大学出版局

〒214-0033 川崎市多摩区東三田2-1-2 専修大学購買会別館2階
TEL 044-911-7179 FAX 044-911-1382

大正大学出版会

〒170-8470 豊島区西巣鴨3-20-1
TEL 03-5394-3026 FAX 03-5394-3038

玉川大学出版部

〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1
TEL 042-739-8935 FAX 042-739-8940

中央大学出版部

〒192-0393 八王子市東中野742-1
TEL 042-674-2351 FAX 042-674-2354

東京大学出版会

〒113-8654 文京区本郷7-3-1 東京大学構内
TEL 03-3811-8814 FAX 03-3812-6958

東京電機大学出版局

〒101-8457 千代田区神田錦町2-2
TEL 03-5280-3433 FAX 03-5280-3563

東京農業大学出版会

〒156-8502 世田谷区桜丘1-1-1
TEL 03-5477-2562 FAX 03-5477-2643

東京農工大学出版会

〒183-8509 府中市幸町3-5-8 東京農工大学内
TEL 0423-67-6700 FAX 0423-67-6700

法政大学出版局

〒102-0073 千代田区九段北3-2-7 法政大学一口坂校舎内
TEL 03-5214-5540 FAX 03-5214-5542

武蔵野大学出版会

〒202-8585 西東京市新町1-1-20 武蔵野大学構内
TEL 042-468-3003 FAX 042-468-3004

武蔵野美術大学出版局

〒180-8566 武蔵野市吉祥寺東町3-3-7
TEL 0422-23-0810 FAX 0422-22-8309

明星大学出版部

〒191-8506 日野市程久保2-1-1
TEL 042-591-9979 FAX 042-593-0192

関東学院大学出版会

〒236-8501 横浜年金沢区六浦東1-50-1
TEL 045-786-7164 FAX 045-786-9898

東海大学出版会

〒257-0003 秦野市南矢名3-10-35 東海大学同窓会館3階
TEL 0463-79-3921 FAX 0463-69-5087

名古屋大学出版会

〒464-0814 名古屋市中千種区不老町1 名古屋大学構内
TEL 052-781-5027 FAX 052-781-0697

三重大学出版会

〒514-8507 津市栗真町屋町1577 三重大学図書館3階
TEL 059-232-1356 FAX 059-232-1356

京都大学学術出版会

〒606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9 京大館内
TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190

大阪経済法科大学出版部

〒581-8511 八尾市薬音寺6-10
TEL 072-941-8211 FAX 072-941-9979

大阪大学出版会

〒565-0871 吹田市山田丘2-7 大阪大学ウエストフロント
TEL 06-6877-1614 FAX 06-6877-1614

関西大学出版部

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35
TEL 06-6368-1121 FAX 06-6389-5162

関西学院大学出版会

〒662-0891 西宮市上ヶ原一番町1-155
TEL 0798-53-5233 FAX 0798-53-9592

九州大学出版会

〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 九州大学構内
TEL 092-641-0515 FAX 092-641-0172